

Contents

巻頭言：2019 年度基本方針	1
特集：CODE のこれまでとこれから	2
2018 年度活動報告・2019 年度活動計画	6
日中 NGO・ボランティア研修交流事業	10
CODE 未来基金 NEWS	14
食と国際協力	16
スタッフ活動記録・今後の予定	18
会員・寄付者ご芳名	19
イベント案内	19
活動へのご協力をお願い	20

2019.7.31
Vol.63

写真：ボダナートの夕日（ネパール）

巻頭言 CODE 海外災害援助市民センター 2019 年度基本方針

「学び合いと人間の連帯」

2018 年は、国内外で災害の多い一年となった。北部地震、平成 30 年（2018）7 月豪雨、台風 21 号、北海道胆振東部地震などが発生し、日本が災害大国であることを思い知らされた。平成 30 年（2018）7 月豪雨では、72 時間降水量で観測史上最も多い雨が長時間降り続いたことで、岡山、広島、愛媛で甚大な被害を出した。また台風 21 号で関西空港が高潮や液状化で機能不全を起こした。他方、海外でも、インドネシアではロンボク島地震、スラウェシ島地震津波、スンダ海峡火山津波など度重なる被害を受けた。スラウェシ島では、海底地すべりによる到達時間の早い津波や液状化による陸津波という現象を引き起こし、「液状化は人を殺さない」という専門家の常識を覆すこととなった。同国スンダ海峡でも、火山島の噴火によって山体崩壊を起こし、音もなく津波が襲い、「サイレント津波」と呼ばれる稀な現象も見られた。これらの災害後の様相から、私たちは災害の備えを考え直す必要に迫られている。

CODE が連携しているインドネシアのある建築家は、自国の甚大な災害後の復興に対して、「日本の知見を学びたい」というと同時に、「日本には、自然に逆らうのではなく、災害をかわす素晴らしい文化があるはずなのに、なぜ復興においてそれが活かされないのか！？」と問いかけられた。相手を知ることによって自分を知るという異文化国際理解を教えられ、あらためて学び合いの重要性を認識した。

CODE は、阪神・淡路大震災から 24 年間、海外の被災地との学び合いを実践してきたが、これからもより一層海外との学び合いを深め、共に支え合う関係を築いていかなければならない。

四川地震救援プロジェクトの「日中 NGO ボランティア研修交流事業」に今年は高校生、大学生など 7 名が四川省の被災地を訪れた。若者一人ひとりがそれぞれテーマを持って参加したが、全員が共通して「現場に行くこと」、「人に寄り添うこと」、「自分に向き合うこと」の大切さを感じとっていた。若者たちは、誰かに言われて四川の被災地

に行ったのではなく自分の意志で国を超え、ボランティアというものが人と人が支え合う自然な行為で、誰にでも出来ることだと知った。参加したある大学生は、「そこにあったのは支援者と被災者ではなく、人と人の関係そのもので、私が見たい景色だ」と語った。

CODE レター No60（2018 年 5 月 20 日刊）の巻頭言で芹田健太郎前代表理事は、ボランティアの原動力について、「人が人である限り、この心根はすべての人に宿っている。これこそが世代交代で継承すべきものである」と語っている。まさに、CODE が 24 年間紡ぎ、大切にしてきた理念は、若者たち自身が被災地の現場に行くことで、気づき、そして伝わることを実感した。

阪神・淡路大震災から四半世紀を前に、CODE は「人と人がつながること、その人間の連帯が最後のひとりを救い、NGO はその声を代表しなければならない」という言葉の意味を将来世代とあらためて考える一年としたい。

（事務局長 吉椿雅道）

前代表理事 芹田健太郎による これまでの CODE を振り返って

CODE では 2019 年 6 月 8 日の総会にて、代表理事の交代と理事の改選が承認されました。代表理事は芹田健太郎から、副代表理事であった室崎益輝に交代となりました。芹田健太郎は CODE が NPO 法人として再スタートを切った 2002 年から、16 年間の長きにわたり代表理事として CODE を牽引してきました。今回は、芹田健太郎が「CODE」に込めた思いや CODE のこれまでの歩み、そしてこれからに向けた言葉を綴ります。



◆芹田健太郎プロフィール

神戸大学名誉教授。1941 年中国（旧満州）生まれ。京都大学大学院法学研究科博士課程中退。パリ大学博士課程で研修。神戸大学大学院国際協力研究科長、市民と NGO の「防災」国際フォーラム実行委員長、総理府（現内閣府）国際平和協力本部事務局人道救援物資協力問題検討委員会座長、神戸新聞客員論説委員等を歴任。CODE が 2002 年 1 月に NPO 法人となって以来、2019 年 6 月まで代表理事を務める。

CODE と市民とつながり

CODE 海外災害援助市民センターの CODE とは、言わずと知れた Citizens towards Overseas Disaster Emergency の略であり、英語から翻訳すれば、「海外災害緊急事態に対処する市民たち」という一般名詞となり、同時に、code だけなら「規定」とか「法典」（たとえば、civil code 民法典）とか「作法」（たとえば、ドレス・コード）「信号」という、これも一般名詞である。We are code, わたしたちは、海外災害緊急事態に対処する市民たちです。

第一の一般名詞のほかに CODE は、定冠詞付きの the CODE としてわたしたちの NPO 法人の名称であり、メンバーであるわたしたちが「海外災害緊急事態に対処する市民たち」の拠点（センター）となるという宣言である（We are members of the CODE. わたしたちはコードの一員

です）。つまり、わたしたちは「市民」であり、これを代表している。しかし、わたしたちがいう「市民」は、市民革命期にいわれた、財産と教養あるブルジョワと呼ばれる市民たち、ロダンの彫刻のカレーの市民たちを、いわば抽象化した近代市民ではない。わたしたちの「市民」は、「市民と NGO の「防災」国際フォーラム」にいう市民のことで、第一回神戸宣言でいう「外国人、高齢者、障害者、女性、子ども」を示し、目に見えて生活を営む「具体的人間」であり、抽象化されたものではない。こうした人びとのつながりを実現することが目標である（『CODE10 周年記念シンポジウム 寄り添いからつながりへ』報告書）。

第二からいえば、われわれの行動が災害支援の人たちのモデルになるように、との願いが込められている。



Citizens towards
Overseas
Disaster
Emergency

はじまりは 1995 年 1 月 17 日の阪神淡路大震災であった。震災当日僕は、ゼミの学生・OB たちと赤倉スキー場にいた（芹田『21 世紀の国際化論』ひょうご双書）。初代の事務局長となる草地賢一は、北区鈴蘭台の自宅にいた（CODE 理事であった島田誠「草地賢一神戸からボランティア元年を拓く」（刈谷剛彦編『ひとびとの精神史』第 8 巻バブル崩壊 1990 年代一』岩波、所収）。国内のみならず、世界各国から支援が来た。まだ神戸は混乱のただなかにあった同年 5 月 27 日サハリンで M7.6 の大地震が起きた。仮設の寒さを知っていた神戸から、「サハリンの寒さは良く分かる」し、「困ったときはお互いさま」で、はじめての海外支援が始まった（CODE 編著『Kobe 発 災害救援』神戸新聞総合出版センター）。自身が困っている中で、仮設に住む市民たち等募金に進んで応じた。神戸の人たちは、寄付の文化の十分育っていなかった日本では、その意味では、「変わり種」であった。これまで、被災者支援の中で、「寄付の文化」、「保護の文化」の重要性を指摘してきたが、同時に「予防の文化」の重要性も指摘してきた。

海外災害支援は、海外で災害が起きる度ごとに、「〇〇緊急救援委員会」を立ち上げて行ってきたが、2001 年 1 月のインド西部大地震に対して立ち上げた 25 回目の緊急救援委員会が常設のセンターを立ち上げることになり、構想委員会を立ち上げた。委員会は、大震災の復旧・復興や減災研究に取り組んできた市民、研究者、ジャーナリスト、企業、行政、国際機関、NGO などの約 70 人で構成され、ガイドライン、支援プログラム、人材育成、資金調達の 4 つのワーキンググループによって議論を重ね 2001 年末には設立趣意書を取り纏め、翌 1 月 17 日に発足し、その後、NPO 法人として認証された。

過ぎ去った日々は、今につながり、将来の日々につながる。組織は誕生の日から老い始める。可能性をもちながらも、まだ充分生かされていないものは多い。4 つのワーキンググループは課題でもある。人材育成が、若者自身の創意と工夫と力によって、未来基金となって繋がっている。地球自身が大変動期にあり、予防の文化の創設は重要である。若い力に待ちたい。（2019/7/15）

CODE が実施した主な救援プロジェクト

回	発災時期	災 害	被 害	支 援 活 動
1	1995 年	サハリン大地震	死者 2,000 人以上	毛布、衣料の提供
2	1996 年	中国雲南省地震	死者 309 人	小学校建設
7	1997 年	朝鮮大飢饉	不明（死者数十万人）	食糧、衣料の提供
12	1998 年	パプアニューギニア地震津波	死者 6,000 人以上	漁村の小学校建設
17	1999 年	トルコ大地震	死者 18,243 人	市民文化教育センターの建設
18	1999 年	台湾大地震	死者 2,455 人	少数民族の文化センター建設
25	2001 年	インド西部大地震	死者約 20,000 人	耐震住宅の再建
2002 年 NPO 法人として再スタート				
26	2002 年	アフガニスタン地震、紛争	死者不明	女性自立センター建設、ぶどう畑の再生
32	2003 年	イラン南東部地震	死者 26,796 人	防災教育、コミュニティーセンター建設、耐震普及
34	2004 年	スマトラ沖地震津波	死者 227,898 人	スリランカで防災共育、漁船提供
37	2005 年	パキスタン北部地震	死者 73,338 人	女性の職業訓練センターの建設
40	2006 年	インドネシア・ジャワ島中部地震	死者 5,716 人	伝統構法の住宅再建、水道管施設
43	2008 年	中国四川省大地震	死者 69,226 人、行方不明 17,923 人	ガレキ撤去、祭り開催、老年活動センター建設、防災教育
46	2010 年	ハイチ大地震	死者約 316,000 人	移動診療所、農業技術学校建設
48	2010 年	中国青海省地震	死者 2,698 人	ヤク銀行
50	2011 年	東日本大震災	死者 15,895 人、行方不明 2,539 人	スタッフ出向、足湯、まけないぞう
53	2013 年	フィリピン台風	死者 6,329 人、行方不明 1,074 人	漁村の生業支援、女性の収入向上
56	2015 年	ネパール地震	死者 8,964 人	雨期テント提供、耐震住宅再建
62	2018 年	インドネシア・スンダ海峡火山津波	死者 430 人、行方不明 29 人	火山噴火の学び合いの場を提供



サハリン大地震救援（1995 年）



10 周年記念シンポジウム（2012 年）



インドネシア・スンダ海峡火山津波救援（2018 年）

新代表理事就任にあたり

世界の救援ニーズに応える基盤強化

代表理事 室崎 益輝

兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 科長・教授

◆プロフィール

1944 年 尼崎市生まれ。京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了。工学博士。神戸大学都市安全研究センター教授、消防庁消防研究センター所長、関西学院大学災害復興制度研究所長、ひょうご震災記念 21 世紀研究機構副理事長、ひょうごボランティアプラザ所長などを歴任。2017 年 4 月より現職。CODE では 2002 年 1 月の NPO 法人発足以来、2019 年 6 月まで副代表理事を務める。



日本だけでなく世界においても、大規模な災害が多発している。大規模な災害が、増加しているのは、自然が激甚化していることに加えて社会が脆弱化しているためである。貧困などの国際社会が抱える様々な歪みが顕在化し、被災の激化がもたらされている。そのことにより、被害の軽減をはかる国際的な支援ニーズも大きくなっている。私たちの CODE 海外災害援助市民センターの責務も、それだけ大きくなっている。

この災害が多発する時代においては、地球規模で間断なく大規模な災害が起きていること、さらには回復の遅れによる被災の長期化が起きていることにより、災害救援の持続化と日常化が求められるようになっている。直後だけの支援活動あるいは断続的な支援活動だけでは、直面する膨大な救援ニーズに応えることができない。この支援の日常化

においても、被災者が自立するまでの長期支援を心がけてきた CODE への期待は大きい。

その世界の救援ニーズに応えるために、CODE の活動態勢と活動環境の一層の強化が求められている。芹田前代表は、その強化のために「横のつながりと縦のつながり」がいと提起されている。横のつながりは支援文化の裾野を広げることで、多くの人々とつながることである。CODE のこのころを持った活動の輪を大きく広げてゆきたい。

もう一つの縦のつながりは未来を担う若い世代を育むことで、世代を超えた支援の連携をはかりつつ、支援のバトンを引き継ぐ努力が求められる。今回の理事の交代で、若い力を広く迎え入れることになった。CODE 未来基金の取り組みを含め、若い力を基盤にして前に進んでいきたいと思う。

新任理事のご紹介

副代表理事 宮本 匠

兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 講師



◆プロフィール

1984 年大阪府生まれ。大学在学中におきた新潟県中越地震の被災地で、2 年間の現地居住を含めて、集落支援の現場に関わったことが原点。研究テーマは、内発的な災害復興プロセスや災害ボランティアについて。新潟県中越地震や熊本地震の被災地などで、復興支援に関わりながら研究を続けている。

◆抱負

最近では、日本の防災や復興についての教訓、経験をいかに国外に発信するかが重視されているように思うのですが、私は逆に、今こそ国外の被災地から何を学ぶことができるかが大切だと思います。特に、日本と状況が違い、日本ではこのような素晴らしい取り組みは難しいのではと思えるような事例にこそ、私たちの想像力を鍛えるものがあると思います。経験豊かな CODE の皆さんと一緒に学んでいけたらと思います。

理事 西海 恵都子

神戸新聞社 編集局 局長



◆プロフィール

1964 年兵庫県明石市生まれ。関西学院大学社会学部卒。1987 年、神戸新聞社入社。阪神・淡路大震災のときは社会部の兵庫県政担当で、復興計画や被災者支援対策、県外避難者らの取材を重ねた。当時、地元自治体は何をするにも国の許可を取らねばならず、中央集権の弊害を目の当たりにした。神戸新聞地域総研企画調査部長、編集局文化生活部長、報道部長、編集局次長などを経て、今春より現職。

◆抱負

CODE は私にとって、長らく取材対象でした。ずっと外から見つめてきましたが、今回ご縁があつて、内側からかわらせていただくことになりました。震災から四半世紀。社内でも、震災を知らない記者が多数となり、これまでの蓄積や経験をどのようにつないでいくかが大きな課題です。それは CODE にも共通するテーマだと思います。双方を行き来しながら、私の中でよい循環が生まれるのではないかと、楽しみにしています。

理事 岸本 くるみ

神戸学院大学 現代社会学部社会防災学科 実習助手



◆プロフィール

1987 年兵庫県神戸市生まれ。舞子高校環境防災学科一期生（別名モルモット）。CODE の方々と出逢い事務所にお邪魔するようになる。神戸学院大学防災・社会貢献ユニットで防災教育に触れ、卒業後に青年海外協力隊として中米のエルサルバドルへ。その後は東日本大震災で汚れた写真の修復プロジェクトの神戸スタッフ、人と防災未来センターの震災資料専門員、現在は神戸学院大学現代社会学部社会防災学科の実習助手。お次の仕事は未定。

◆抱負

はじめまして。私は CODE さんに学生時代からボランティアスタッフとしてお世話になっていました。再びつながりをいただき、恐れ多くうれしい気持ちです。1995 年私は CODE 事務所近くの小学校に通っておりました。被災地の子どもだった私も、立派ではありませんが大人になりました。いただいていた見えないおくりものを、私もいつかの誰かにおくれるでしょうか。初理事ですが何かお役に立てれば幸いです。よろしく願いいたします。

理事 成安 有希

関西学院大学 ボランティア活動支援センター

ヒューマン・サービス支援室 ボランティアコーディネーター



◆プロフィール

1993 年大分県大分市生まれ。2012 年関西学院大学社会学部に入学。大学 4 年間、東日本大震災の被災地をはじめ、国内外の被災地復興支援を中心に教育や地域活性などのボランティア活動にも参加。CODE が主催する「日中 NGO・ボランティア研修交流事業」にこれまで全回参加。ボランティア活動を通じた色々な方との出会いに魅力を感じ、継続的に活動が続ける。2016 年から現職。

◆抱負

大学 3 年生の頃に CODE と出会い、そこから日中 NGO・ボランティア研修交流事業を中心に様々な形でコアに関わり続けさせていただいています。この度 CODE の新理事ということで、こんな私には荷が重すぎると思ったのですが、これまで育てていただいた CODE に少しでも恩返しできるならと引き受けさせていただきました。まだまだ勉強させていたくださりかと思いますが、CODE のために力を尽くせればと思っています。これからもどうぞ宜しくお願いいたします。

2018 年度事業報告 & 2019 年度事業計画

海外災害地への救援活動事業

アフガニスタン

2018 年度報告

2003 年より始まった「ぶどう畑再生プロジェクト」は、16 年間続いている事業です。タリバンによって焼き払われたミールバチャコット地域のぶどう畑を再生するために、現地の人たちが協同組合（コーポラティブシューラー）を設立しました。組合を通じてぶどう農家に再建資金を融資し、返済された資金で新たな農家を支えるというマイクロファイナンス（小規模融資）方式で行っています。当初、288 世帯から始まりましたが、これまでに 550 世帯が融資を受けました。また、2013 年からは現地の有機レーズンを輸入・販売し、アフガニスタンの現状を知るきっかけとしてきました。2018 年は 60kg を輸入・販売し、これまでに総計 520kg を輸入・販売しました。

2019 年度計画

今年度も「ぶどう畑再生プロジェクト」を継続し、現地の有機レーズンを現地で浸透させること、そしてレーズンの輸入・販売を通じてアフガニスタンの現状を伝える機会を作ることに取り組んでいきます。



中国・四川省

2018 年度報告

甚大な被害を出した四川地震から 10 年の節目ということで、四川省成都市で 10 周年シンポジウムを現地の NGO と共同で開催し、日中の NGO、大学関係者から様々な報告がありました。また、毎年実施している「日中 NGO・ボランティア研修交流事業」も 5 回目を迎え、今回は高校生 3 名を含む若者 7 名が四川の被災地を訪れました。四川大学での防災教育の授業への参加や光明村の村民との交流など、日本の若者が学ぶ場を提供しました。

2019 年度計画

現在、村の幹部交代によって休止状態になっている光明村の老年活動センター（2012 年 CODE が建設）を、農家楽（農家レストラン）として再開するために、村民委員会のフォローを行っていきます。また、現地の NGO 備災センター（新安世紀教育安全科技研究院）や大阪大学（渥美公秀教授）と共に年 2 回（1 回目は 6 月 17 日～23 日に開催）、防災・復興に関する「中日安全技術研修」を実施することで、日本と中国で学び合いの機会を積極的に提供していきます。



ネパール

2018 年度報告

2015 年の地震後、CODE は辺境のグデル村で雨期対策のためのテントシートの配布、耐震住宅再建プロジェクト、若き大工の技術研修支援などを行ってきました。2018 年は、グデル村シャーレ地区で、地元の農産物を使った加工品を通じて収入向上を考えることで、辺境の山村での持続可能な暮らしをめざしてきましたが、カウンターパートが別事業で多忙なため思うように進むことができませんでした。



2019 年度計画

今年度はグデル村シャーレ地区で「シェルパ村落開発改善委員会」と共に持続可能な暮らしを実現していきます。まずはスタッフを派遣し、現地での詳細な調査、イモやトウモロコシなどの加工品の開発、村内のバザール（市場）での加工品販売などを行い、収入向上をめざします。

インドネシア

2018 年度報告と 2019 年度計画

ロンボク島地震

ロンボク島では連続して地震が発生しました。CODE はエコ・プロワットさんと北茂紀さんなどの建築家と共に現地調査を行いました。その中で出会った、支援から取りこぼされている被災地の村で住民組織「パトゥ・アジェ」と共に木造住宅再建のデザイン提供を行い、木造建築の意味や暮らしを考えるワークショップを行います。

スンダ海峡火山津波

ジャワ島とスマトラ島の間に位置するスンダ海峡で大規模な火山噴火が発生し、山体崩壊によって津波が発生しました。音もなく突然津波が襲ったことで多くの人が被害を受けました。CODE はインドネシア建築家協会のマスタヒオさん達と現地調査を行い、津波などの災害後の復興のあり様について議論をした結果、両国で学び合うことの重要性を互いに感じました。CODE は、日本の専門家を交えた学び合いの場を提供していきます。

スラウェシ島地震

スラウェシ島では、地震によって津波や液状化が発生し、甚大な被害を出しました。CODE は現地の建築家ラーマットさんたちと現地調査を行い、伝統木造建築を使ったコミュニティスペースの建設を行うことになりました。そのスペースは、液状化によって故郷を失った子ども達を読み書きや舞踊、音楽を学ぶ場として活用されます。



NGO ことはじめ

2018 年度は、榛木理事、村井理事を講師に「基礎編」（参加者 12 名）、「実践編」（参加者 13 名）の 2 回を開催しました。NGO とはどのようなものか、CODE の理念や NGO の在り方などを学びました。2019 年度も同様の講師で「概要編」、「実践編」を開催します。（2019 年 6 月、7 月に開催し、終了しました。）



月イチシリーズ 食と国際協力

2014 年から開催しているこの企画は、食を通じてその国、地域のことを知ることで、災害が起きた時に身近に感じてもらうという主旨で開催しています。2018 年度は、アフガニスタン、ネパール、台湾、フィリピン、モンゴル、インドネシア、チベット、イランをテーマに 9 回開催しました。2019 年度もフィリピン、中国、ハイチ、ネパールなどをテーマに開催していきます。



CODE 未来基金

将来の NGO を担う若者を支える未来基金では、これまでに海外のフィールドワークでは、フィリピン、ネパール、中国で神戸大学、兵庫県立大学、神戸学院大学などの学生 12 名が、様々な経験と学びを得る機会を提供してきました。またインターンとして愛媛大学の学生が CODE 事務局で半年間 NGO の仕事を体験しました。その若者たちを支える大人たちに向けた報告会やサポーターミーティングも複数回開催してきましたが、資金が不足しています。未だ社会が若者を支える気運を創るに至っていません。引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。



【過去の事業報告に関して お詫びと訂正】

この度、認定 NPO 法人取得に向けた神戸市との協議での指摘により、2014 年 4 月 1 日から 2018 年 3 月 31 日までの事業報告において、財産目録及び貸借対照表の「未来基金」の科目処理に誤りが見つかりました。ここに、お詫びして訂正申し上げます。2018 年度の報告からは、税理士の方に入っていただいて既に訂正しております。詳細は CODE ホームページに掲載いたしますので、そちらでご確認ください。

例年通り、2018 年度も神戸学院大学現代社会学部の「社会防災特別講義Ⅱ」、神戸女子大学神戸国際教養学科の「国際ボランティア活動論」の連続講義を受託し、神戸大学、兵庫県立大学、龍谷大学、関西国際大学、大阪大学、大阪大谷大学、舞子高校、神戸工科高校などでも NGO や国際協力の講義を行いました。また、コープこうべとは、インドネシアの災害支援やレーズン販売で、関西 NGO 協議会とは、理事参画や Kansai-SDGs 市民アジェンダ、ワン・ワールド・フェスティバル for Youth で協働しました。また、新規として近畿ろうきん「笑顔プラス」とのコラボで、笑顔プラス担当者の研修会などで計 15 回の講演を行いました。その他、アイセック神戸大学委員会やワカモノデカラ、まなびと、神戸ソーシャルキャンパスとは、CODE 未来基金を通じて関係を深めてきました。2019 年度も同様に各機関とのネットワークを大切にしていきます。

海外では、フィリピン・セブ島にある NGO ネットワーク「ABAG Central Visayas」、中国四川省の NGO 備災センター（新安世紀教育安全科技研究院）、ネパールのシェルパ村落開発改善委員会と、各支援プロジェクトを通じてネットワークを深めていきます。

「市民による災害救援」に関する調査・研究事業

2018 年度は後半インドネシアで立て続けに災害が起きたことで、CODE 寺子屋の実施には至りませんでした。2019 年度は、阪神・淡路大震災から 25 年をテーマに CODE 寺子屋を開催します。CODE の前代表理事である芹田健太郎（神戸大学名誉教授）、現代表理事の室崎益輝（兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科科長・教授）、前理事の松本誠（市民まちづくり研究所所長）の 3 名による「阪神・淡路大震災から 25 年」の寺子屋を開催します。日時や場所は追ってご案内します。どうぞご参加ください。

CODE 未来基金へご寄付のお願い！

CODE 未来基金は、災害救援や国際協力、市民活動のこれからを担う若者たちをサポートするための基金です。若者たちが安心して多様な生き方を選べる社会を作っていくには、みなさまお一人おひとりのご支援が必要です。NGO の取り組みを将来世代にわたって引き継いでいくため、CODE 未来基金へのご協力をよろしくお願いいたします。

◆CODE 未来基金のプログラム

【海外フィールドワーク】

NGO や国際協力の現場を知るために、若者自身が計画した行程で海外の被災地を訪れます。

【インターンシップ】

将来 NGO で働くことを視野に NGO で半年間のインターンを行います。



◆ご寄付の方法

【郵便振替】

口座記号番号:00930-0-330579
加入者名:CODE

【銀行振込】

ゆうちょ銀行
支店名:〇九九店(ゼロキュウキュウ)
支店番号:099
預金種類:当座
口座番号:0330579
口座名義:CODE

【クレジットカード】

CODEホームページよりご寄付いただけます。
<http://code-jp.org/future-fund/index.html>

※通信欄、備考欄に「未来基金」とご記入ください。

【四川大地震救援プロジェクト】

第5回日中 NGO・ボランティア研修交流事業

編集：原田梨央（ボランティアスタッフ）



2014 年度末から始まった日中 NGO・ボランティア研修交流事業の第5回が 2019 年 3 月に実施されました。この企画は災害多発国である日本と中国が、今後の災害に向けて市民レベルで連携をしていくこと、そして海外の被災地での学びを機に未来の NGO を担う若者を発掘することを主旨としています。

日程：2019 年 3 月 18 日（月）～ 24 日（日）

訪問地：北川県、汶川県、理県、成都市などの被災地

内容：被災地の視察、被災者へのヒアリング、現地 NGO との防災の交流、
四川大学で防災教育の授業に参加、チャン族の伝統集落の訪問、
CODE の支援先である光明村村民との交流

《参加者》

1. 森口花マティナー 17 歳 神戸龍谷高校グローバルコース 2 年
 2. 山内優 18 歳 神港橋高校 3 年
 3. 柳瀬彩花 18 歳 屋久島おおぞら高校 3 年
 4. 西岡かりん 20 歳 関西学院大学文学部 2 年
 5. 原田梨央 20 歳 武庫川女子大学薬学部 2 年
 6. 成安有希 25 歳 関西学院大学ボランティア活動支援室職員
 7. 曾翕如 27 歳 大阪大学大学院人間科学研究科修士課程 1 年
- （同行：吉椿雅道 CODE 海外災害援助市民センター事務局長）

若者たちが見て、感じて、考えた 5 日間

被災地視察 1

地震によって壊滅的な被害を受けた北川县城（県庁所在地）を訪れた。建物の崩れ方を視察したり、当時の政府の対応などの話を聞きながら、学生たちは大きな規模で遺跡を残すことについての是非を考えさせられる場面も見られた。



若者の声「震災の恐怖を五感で感じる」

今回の研修で一番私の心に残ったのは、初日に訪れた北川县城の地震遺跡です。倒壊したビルや店舗、学校が災害の凄惨さを物語っていて、震災直後にタイムスリップしたかのような息を飲む光景が目の前に広がっていました。この政府の決断には賛否両論あります。

私は被災地を遺跡として残すことで、私のように実際に大震災を体験していなくても、現地で震災の悲惨な爪痕を目の当たりにして、震災の恐怖を五感で感じることで、防災や減災に対する意識が高くなると思いました。（森口花マティナー）



被災地視察 2

被災地の中で最もチャン族の伝統文化を残す「桃坪」集落では、学生たちは初めて知る生活防災に圧倒されている様子であった。学生は建物やその窓に隠された工夫を学んでいき、何か特別なことではなく、普段の生活に防災があふれていることを知った。（みなさんもぜひ右のクイズに挑戦してみてください！！）



② 生活防災クイズ ②

Q. 内側にかけて広く作られているこの窓、実は、7 つの役割を果たしています。あなたはいくつ思いつきますか？（窓は建物の東側に 2 つのみ）



答えはこの CODE Letter のどこかにあります。探してみてください。

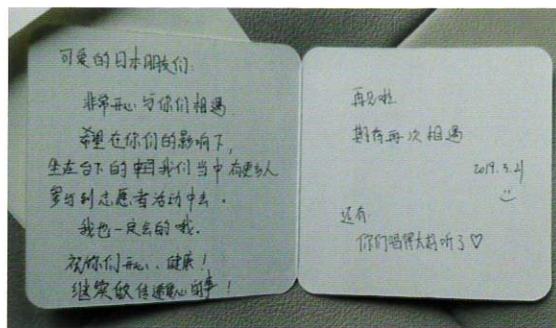
若者の声「伝統文化から学ぶ防災」

災害や防災について何の知識も持たないまま参加した私は、過去の参加者さんの感想文の中にあった「みんなが守りたいものは何でも防災につながる」という言葉に強く惹かれました。防災と聞けば、避難訓練など何か特別なことばかり思いつきますが、ここチャン族の村では当たり前の生活を守るために、普段生活の中にたくさんの工夫がなされていました。大きな取り組みをする前に、誰にでもできる防災があるのでは？と考えさせられました。人の知恵があふれた素晴らしい場所でした。（原田梨央）



四川大学での若者交流

四川大学では、防災教育の授業に参加させてもらった。日本の学生からは防災ダックの紹介と学生個人のボランティア活動を発表し、中国の学生も積極的に質問するなど非常に高い関心を向けていた。最も印象的だったのは日本側から中国の「朋友」を歌った時に、中国の学生がものすごい熱気で一緒に歌ってくれたことである。日本ではあまり見られない積極性に、文化や教育の違いを実感する学生たちであった。



授業後にある学生からもらった手紙

《訳》

今日、皆さんに会えて本当に楽しかったです。今日の皆さんの授業の影響で、私たちの中でボランティアに参加する人がもっと増えていくことを願っています。私も必ずやります。



若者の声「涙が出そうになる瞬間」

四川大学での発表の時間はとても楽しかったです。質問にもたくさん答えてくれたり、みなさんのリアクションが発表していて、すごく気持ちよかったです。私たちが「朋友」を歌ったとき学生の皆さんも一緒に歌ってくれたことがすごく印象に残っています。私はこの曲を四川研修に参加して初めて知ったし、初めて来た場所で初めて会う人と一緒に歌ったけど、歌ってる間すごくのどが熱くなって声がでにくくなり涙が出そうになりました。(山内優)

振り返りミーティング・観光

研修中に訪れた被災地や講義についての事実確認の共有を行った。勘違いをしていたことや聞き漏らしたことを共有することで、より理解を深められたとともに、それぞれがどこに重点をおいて今回の研修に向き合っていたのかを知ることができた。ミーティング後は、観光地を訪れて四川の文化に触れた。



若者の声「人は文化だ」

今回の四川研修での私の目標は、「文化を介して被災者との接し方を学ぶ」でした。四川に行き、言葉が異なっても通じるものはあるんだ！ということをもっと経験しましたが、反面、言葉が通じないもどかしさを感じ、もっと仰っていることを理解したいという気持ちになりました。

テーマは立てたものの、まずそのスタートラインに立てない、ということを感じました。そんなことを考えていた時に、吉椿さんが「人が文化だよ」ということを仰いました。文化を介して人を理解しようということより、人そのものが文化であり、家族や友人のように理解しようということこそ大切だということを教わりました。(西岡かりん)



若者の声「ひたすら、想う」

「ひたすら、想う」が私が今回の研修で学んだことです。普段から目の前の相手を「ひたすら想うこと」ができていたのか、自分にすごく問われました。一週間を通じて見えたのは、吉椿さんがメンバー一人ひとりを「ちゃんと」知ろうとする姿勢でした。一人ひとりを「ひたすらに想う」その姿勢は、被災地でも「最後の一人まで」寄り添い続ける CODE の理念そのものでした。最後の振り返りの際、吉椿さんに言われたのは「日頃からそんな姿勢でいられるかが重要」ということでした。日頃からのそんな姿勢が被災地で活かされる。被災地だから日頃できないことができる、ということではない。研修に参加させていただくたびに、自分の足元を見直してはっとさせられます。(成安有希)

光明村での交流

CODE が地震直後から支援を続けている北川県光明村で村民との交流を行った。震災当時の話を聴かせていただく以外にも、一緒に食事を作ったり、歌を歌ったりした。学生はボランティアというものが、何かをすることだけでなく、相手に寄り添うことやそれによって自分自身も勇気をもらえるということに気づききっかけとなった。



若者の声「ボランティアの多様性に気づく」

今回の研修では「しんどい」と向き合うことをテーマにしました。吉椿さんから「被災された方にいろんな人がいるように、寄り添うボランティア側にも力があるたくましい人もいれば、繊細で人の気持ちに気づける人もいべきだ」というお話がありました。また、今までの私の考え方が大きく変わった出来事がもう一つあります。それは一つの質問で相手を知ることとはできないということです。光明村で村の方と吉椿さんのボランティアを通してだけでなく、これまで何度もお話や食事をして何年もかけて築いた良い関係性を目の当たりにしました。一つの質問で相手のことを分かってほしいのは考えが甘かったし、地道に関わらず、人の背景が分かるはずないことに気づき衝撃を受けました。これからは自分の性格だからこその被災地や被災された方との関わり方を探していきます。(柳瀬彩花)

同行者より

「若者の成長を目にして」

この事業は 2014 年からスタートし、今回で 5 回目になる。これまでに 25 人の若者がこの事業で四川省の被災地を訪ねた。今回は、初めて高校生 3 名が参加し、大学生、社会人の計 7 名で四川省の被災地を巡った。

毎回、参加者各自がテーマを持って参加しているが、今回もそれぞれが自分のテーマに向き合いながら、時に悩み、考え込む姿が見られた。

ある参加者は、途中笑えなくなっていた。周りのノリについていけず、一人悩んでいた。それを気づかれまいと、ひきつるように笑っていた。自分の事で精いっぱいだった。だが、少しずつ自分の個性に気づき、自分自身を認められるようになった。最終日、他の参加者からその彼女の姿にたくさんの事を学んだという声が上がった。それを聞いた彼女はちゃんと笑えるようになっていた。いつの間にか参加者や被災者に支えられていることに彼女は気づき、変わっていった。

また、第 1 回から毎回参加している女性がいる。彼女は「光明村のあの人にまた会いたい」と四川に通い

続けている。第 1 回は学生で年下だった彼女は、周りについていくだけで精いっぱい悩んでいた。だが、いつの間にか年下の参加者をフォローし、次の世代を支える目線で、この事業を陰で支える存在に成長していた。

この旅の最後は、それぞれの想いを皆で共有する。毎回涙を流しながら自分の想いを語る人が出てくる。若者たちが、被災地の空気を生身で感じ、被災者の声に耳を傾ける。そして自分自身の課題に気づき、日本での生活、そして将来に向き合っていく。

たった 1 週間ではあるが、そんな若者たちの心の変化や成長していく姿に、逆にこちらがたくさんの気づきや学びをいただいた。(吉椿雅道)



インタビュー

CODE未来基金インターンシップ

立部 知保里

2019年4月から半年間、CODE 未来基金のインターンとしてCODE 事務局で働いている立部知保里さん。インターン期間も3か月が経過した今、立部さんにインタビューを通じてこれまでを振り返ってもらいました。

Profile

兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科博士後期課程所属。大学生時代にフィリピン語を専攻し、1年間フィリピン・マニラに留学。その時のボランティア経験より、国際協力や支援、防災に関心を持つ。大学卒業後、斜面防災の企業に就職。2017年4月、兵庫県立大学の同研究科修士課程に進学。フィリピンの台風被災地の復興について研究する。2016年熊本地震、2017年九州北部豪雨、2018年西日本豪雨で被災地支援に携わる。2019年4月より、CODE 未来基金インターンシップとして活動。

ーインターン期間の半年間のうち半分を終えました。CODEには慣れましたか？

CODE がはじめましての団体ではなく（スタッフが）知っている人でもあり、また仕事をするというのはこれまでに経験はあったのでハードルなく慣れました。

ー以前から関わっていたとしても、インターン前と比べてCODEにギャップなどを感じましたか？

特に感じたわけではないですけど…被災地 NGO 協働センターとは（事務所を同じにしているが）仕事や活動、会計など別々にやっているんだなと知りましたね。

ーこれまでのインターンではどんなことをされたんですか？

イベントの企画・広報や CODE Letter の作成、講義の同行、未来基金のイベント、リーフレットの更新、救援プロジェクトのことを教えてもらったりいろいろありました。CODE Letter の作成やホームページの更新などでソフトの

使い方に慣れるのが大変でしたね。あとは大学生のフィリピンでの研修に同行するための企画作りもしています。

ーNGOの地味な部分も体験しているのかなと。

そんなに派手なものと思っていなかったので大丈夫です（笑）

ーその中でこの仕事はちょっと苦手だななんてこともあったんですか？

イベントや未来基金の企画でどうやって人に関わってもらうか、それは悩ましいですね。

プロジェクトの報告を聞いてみただけではわからない、プロジェクト運営の目線からのお話は勉強になります。外から見ただけだとCODEとは違う面白さがあります。あとは現場に出たいという気持ちもありますが、事務所での仕事も苦ではないです。

ーそんな3か月間の経験を振り返ってNGOというものへの見方は何か変わりましたか？

CODEに出会うまでは「NGOとは？」と考えることもありませんでした。市民活動をする団体くらいしか思っていなかったですね。非政府ということへのこだわりは団体に入る前から感じていました。あとは寄付で活動することを大事にしているとか。実際にCODEに入ってから、政府から独立して独自の活動をするのをどう実現しているのかということや業務の一つひとつのところの実践の部分が見えてきましたね。NGOということにこだわっている団体と実感しました。軸があるんだなと。

ー立部さんは企業での就職経験などありますが、企業と比べての違いなども感じたりしましたか？

働く上での違いというのと、そうですね…。どちらも柔軟性は必要かとは思いますが、どこに軸を置くかが大事ですよね。被災地支援でも、「被災者のためになるのか」という軸があって、その周辺は変にルールありきにならない方がいいとか。そういう軸や大事な視点を共有する中で、NGOも企業もそれぞれのスタンスや役割をもって活動していくのがいいのではないのでしょうか。

NGOの中にもいろいろなカラーがあると思うので、こだわりを持ったり独自の活動をしたりしつつ、お互いちょっと話をしてみる、という対話やつながりも大事にすると良いのかなと思います。



高校生に向けての授業



引き続き国内の現場にも携わっている
(広島県坂町)



インターン期間中はパソコンに向き合う時間も多し

ーNGOの仕事にも理想と現実がある中で、自身の将来につながっていると感じることはありますか？

基本的にあらゆることが（将来には）つながっていますよね。相変わらず迷ってはいます。将来はNGOに属しているのか、研究者なのか、どちらでもないかたちなのか。災害救援に関わるという点は変わりません。ただ、それでどうやって生活していくのかということは大きな課題です。迷って迷って、選択肢を増やしていくことができればと考えています。

ー3か月間で大きな学びを得てもらい嬉しい限りですが、残りの3か月間でやりたいことはありますか？

フィリピンの研修は、参加する学生さん自身にも、現地の人にも、CODEのプロジェクトにも、何か得られるものがあるようにしたいと思っています。あとは…そうですね、CODEのこれまでのいろいろなプロジェクトの中の「住民グループ」について調べて、何かまとめられたらいいなと思います。大学院の研究テーマでもあるので。あとは自分のインターン記録を何かしら発信できたらとか。

ーでは最後に、この未来基金インターンの活動を後押ししていただいている、サポーター、寄付者、未来基金を支えていただいている方にひとこと！

転職して今CODEで働けているのは周りの環境や支えてくれている方のおかげです。仕事をする中で、改めていろいろな方がCODEを支えてくださっていること、CODEが被災地KOBEで積み上げてきたものを感じています。私はいろいろなめぐり合わせで今ここで活動させていただいていますが、そういう支えられていること、積み上げてきたことを忘れないで、（残り3か月も）頑張っていきたいと思っています。

インタビュー・文：上野智彦（CODEスタッフ）

イラン・イスラム共和国

面積	日本の約 4.4 倍
人口	約 8,291 万人 (2019 年)
首都	テヘラン
民族	ペルシャ人、アゼリ系トルコ人、クルド人、アラブ人ほか
言語	ペルシャ語、トルコ語、クルド語、ほか
宗教	イスラム教 (主にシーア派)、キリスト教、ユダヤ教ほか
主要産業	石油関連産業
通貨	リヤル



第 50 回 4 月 18 日

ハイチを訪れて～被災地は今、ハイチ地震から 9 年～
語り手: 上野智彦 (CODE スタッフ)

第 50 回のテーマはハイチです。2010 年の地震で死者 22 万人以上という、2000 年代以降の災害ではスマトラ島沖地震・津波に次ぐ甚大な被害がありました。

CODE スタッフの上野が 2019 年 3 月にハイチを訪れ、CODE が支援している農業技術学校 ETAL の状況をモニタリングしてきました。

ハイチは元々豊かな土地だったにもかかわらず、植民地支配や政治不安が続く中で森林が破壊され、極度の貧困に陥っています。

ETAL の現状や課題、生徒や先生一人ひとりの声・事情が語られました。ETAL はこれまで多くの卒業生を送り出しましたが、運営

費などの課題を抱えつつ、「ETAL らしさ」を模索しながら運営をしていると、上野は語ります。今回の食はスープ・ジュームーという牛肉の入ったカボチャスープと赤豆のごはんです。さらに、ハイチはかつて世界最大のコーヒー豆生産国だったとのことで、食後のハイチコーヒーもおいしくいただきました。



ハイチ料理 スープ・ジュームー

第 49 回 3 月 14 日

イランってどんな国? ～イランの人たちと出会って～
語り手: 奥圭三さん、ナヒド・ミールザッハリさん

第 49 回のテーマはイランです。2003 年 12 月 26 日イランの南東部を震源とする M6.7 の地震が発生し、約 27,000 人の方が犠牲になりました。

今回はイランについての著書も書かれている奥さんとナヒドさんご夫妻にお越しいただきました。

イランに対してあまり良くないイメージを持つ人も多い昨今ですが、実はイランはとても近代的でカジュアルな国であるとお二人は語ります。またイランといえば厳格なイスラム教というイメージもありますが、イランの戒律はそこまで厳しくはなく、女性もスカーフの中ではしっかりとオシャレをしていたり、

パーティーなどもよく開催しているそうです。また、深夜に公園に人が集まり運動するなど、暑い国ならではの風習もお話していました。

今回の食は、イランのトマト煮込みホレシェ・バデンジュンです。柔らかく煮込んだ鶏肉をスティックライスといただきました。



イラン料理 ホレシェ・バデンジュン

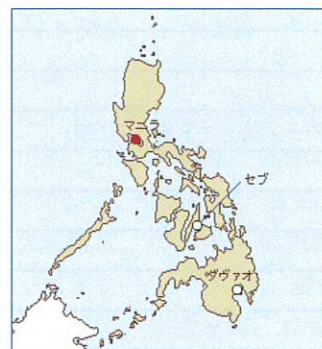
ハイチ共和国

面積	北海道の約 1/3
人口	約 1,126 万人 (2019 年)
首都	ポルトープランス
民族	アフリカ系 (約 9 割)、ムラート
言語	ハイチ語、フランス語
宗教	キリスト教、ブドゥー教、ほか
主要産業	農林水産業、軽工業
通貨	グールド



フィリピン共和国

面積	日本の約 8 割
人口	約 1 億 800 万人 (2019 年)
首都	マニラ
民族	マレー系、中国系、スペイン系、ほか
言語	フィリピン語、英語、ほか
宗教	キリスト教、イスラム教
主要産業	農林水産業
通貨	フィリピン・ペソ



第 51 回 5 月 17 日

フィリピン「人」の魅力～都会で暮らして、田舎で暮らして～
語り手: 立部知保里 (CODE インターン/兵庫県立大学大学院生)

第 51 回のテーマはフィリピンです。2013 年に台風ハイエンで大きな被害があり、CODE は漁業支援としてボート・漁具の提供や、女性たちの生活向上支援、コミュニティ防災支援を行っています。

今回の語り手の立部さんは、大学生時代にフィリピン語を専攻してマニラに 1 年間留学し、大学院では台風ハイエンで被災した農村・漁村に滞在しながら研究をしています。フィリピンの魅力は人だと語る立部さん。フィリピンでの生活は貧しさと共に暮らしながら、けれど豊かでもあるそうです。よく食べ、よく笑う、明るくてホスピタリティにあふれるフィリピンの人々の様子が語られました。また、現地の人た

ちに対して、研究者や日本人としてかかわることでの戸惑いやもややについても話してくださいました。

今回の食は、ティノーラン・イスダという魚のスープです。フィリピン料理としては日本でなじみの薄い料理ですが、立部さんが滞在した漁村の家庭ではよく食べていたそうです。



フィリピン料理 ティノーラン・イスダ

第 52 回 6 月 14 日

パタンジェ村の人々と共に～ネパールの山村から～
語り手: 廣本勝治さん、廣本敏美さん (夢広の会)

第 52 回のテーマはネパールです。2015 年に大きな地震があり、CODE は山間地のグデル村で耐震モデルハウスの建設を通じた住宅再建などの支援を行いました。

廣本さんご夫妻は 2015 年に「夢広の会」を発足され、現在パタンジェ村で手芸教室や農業指導などの活動をされています。地震後の住宅再建支援では CODE も協力させていただきました。

パタンジェ村では、かまどのすすで目やのどの病気にかかる人が多いと聞き、村のすべてのお家に煙突を取り付ける取り組みをされました。勝治さんは「現地の文化を変えることだ」という趣旨を住民の方に理解してもらうのが一番大変だ

けど大切」と話されていました。一緒に参加された夢広の会の方々は、「手芸を教えるというよりも一緒に楽しんでいる」とのこと。村の方との温かい交流の関係がうかがえました。また、ピケピーク登山を含めたネパールへのトレッキングツアーも企画しているそうです。

今回の食はネパールカレーです。ほうれん草を練りこんだ緑色のナンと一緒にいただきました。



ネパール料理 カレー

ネパール連邦民主共和国

面積	北海道の約 1.8 倍
人口	約 2,860 万人 (2019 年)
首府	カトマンドゥ
民族	インド・アーリア系とチベット・ミャンマー系 約 100 民族
言語	ネパール語
宗教	ヒンドゥー教、仏教 イスラム教、ほか
主要産業	農林業、観光業
通貨	ネパール・ルピー



スタッフ活動記録・今後の予定

活動記録

5/5	関西 NGO 協議会理事ミーティングに出席（吉椿）
5/9	関西 NGO 協議会理事会に出席（吉椿）
5/10	JICA 草の根フィリピン事業のテレビ会議（金沢）に出席（田中教授、吉椿） 神戸女子大学「国際ボランティア活動論」で講義（上野）
5/11	COMING KOBE にブース出展（被災地 NGO 協働センターとコラボ）（立部）
5/14	JICA 主催 NGO「オンリーワン戦略講座」個別面談（上野、立部）
5/15	CODE ボランティアの日（上野、立部、原田さん、羽田さん、山内さん、村井理事）
5/17	神戸女子大学国際ボランティア活動論で講義（村井理事） 第 51 回食と国際協力（フィリピン）で講師（立部）
5/20	神戸新聞未来基金インターン取材（立部、吉椿）
5/22	JICA 草の根フィリピン事業の打合せ（田中教授、斉藤さん、吉椿） 関西 NGO 協議会臨時理事会に出席（吉椿）
5/24	神戸女子大学国際ボランティア活動論で講義（村井理事、上野）
5/26	関西 NGO 協議会 2019 年度定期総会に出席（吉椿）
5/29	第 4 回阪神・淡路大震災 25 年ミーティング（被災地 NGO 協働センター主催）（上野、立部）
5/31	神戸女子大学「国際ボランティア活動論」で講義（村井）
6/3	JICA 主催 NGO『オンリーワン戦略講座』に出席（上野、立部）
6/4	龍谷大学政策学部「地域レジリエンス論」で講義（吉椿） JICA 主催 NGO『オンリーワン戦略講座』に出席（上野）
6/7	神戸女子大学「国際ボランティア活動論」で講義（村井理事）
6/8	CODE 理事会・総会・新理事会・CODE のタベ
6/10	関西 NGO 協議会理事会に出席（吉椿）
6/12	CODE ボランティアの日（上野、立部、原田さん、山内さん、村井理事）
6/14	神戸女子大学「国際ボランティア活動論」で講義（村井理事、上野） 第 52 回食と国際協力「ネパール」を開催（夢広の会、廣本さんご夫妻）
6/18	近畿ろうきん社会貢献預金「笑顔プラス」贈呈式・合同会議に出席（吉椿、上野）
6/18 ~ 22	中日安全技術研修（四川省成都市で開催）で講義（吉椿）
6/21	神戸女子大学「国際ボランティア活動論」で講義（村井理事、立部）
6/23	G20 ユースサミット分科会「若者と防災」に登壇（吉椿） 金光教皇尾教会青年大会で講演（上野）
6/24	NGO ことはじめ概要編（榛木理事）
6/25	G20 大阪市民サミット分科会「Kansai-SDGs 市民アジェンダ」に参加（吉椿） 葺合高校市民専門講師として授業（上野、立部）
6/26	葺合高校市民専門講師として授業（上野、立部） JICA 東京主催 NGO『オンリーワン戦略講座』に出席（上野、立部）
6/28	神戸女子大学「国際ボランティア活動論」で講義（村井理事）
6/29	神戸学院大学「社会貢献学入門」で講義（吉椿）
7/5	神戸女子大学「国際ボランティア活動論」で講義（村井理事）
7/6	神戸学院大学「社会貢献学入門」で講義（吉椿）
7/8	NGO ことはじめ実践編（村井理事）
7/10	北陸学院大学田中教授と JICA 草の根事業（フィリピン）の打合せ（斉藤さん、吉椿）
7/12	神戸女子大学「国際ボランティア活動論」で講義（村井理事、立部）
7/17	関西 NGO 協議会常任理事会に出席（吉椿）
7/19	第 53 回食と国際協力「中国四川」を開催（成安理事、原田梨央さん） コープこうべ平和のつどいでレーズン販売（上野）
7/22	関西大学フィリピンフィールド調査の事前講義（立部）
7/24	CODE 臨時理事会
7/27	兵庫県立大学「防災の国際協力」で講義（吉椿）
7/30	神戸大学教養原論「阪神・淡路大震災」で講義（吉椿）

今後の予定

8/7	関西 NGO 協議会理事会に出席（吉椿）
8/16 ~ 21	JICA 草の根技術協力事業でフィリピンへ（吉椿）
8/25 ~ 30	神戸学院大学インターンシップ
8/25 ~ 9/7	関西大学（永松教授）フィリピンフィールド調査のアテンド（立部）

会員・寄付者ご芳名 (50音順、敬称略) 2019/4/16~2019/7/30

【会費】

安藤尚一、アントニオマルゴット、飯田浩、石上智康、上田耕蔵、鶴飼愛子、鶴飼卓、宇都幸子、江口節、黄貞順、大津暢人、岡本善弘、小沢康英、片岡幸壺、菊田歌雄、草地とし子、公益財団法人神戸 YMCA、小林孝信、坂戸勝、新崎広治、鈴木有、砂川光、空野仁志、竹代一洋、武田節子、田辺エツ、谷雅博、長澤雄二郎、永松伸吾、野崎隆一、野間美子、野本英晴、長谷川眞弓、原千栄子、飛田雄一、兵頭晴喜、福住彬、福原勲、藤島一機、前畑美智子、水平企、三宅保昌、宮本匠、三好ひろ子、有限会社村井新聞店、室崎益輝、山崎清、山田千恵子、山村奈津子、山本健一、山本博子、吉富志津代

【ご寄付】

栗田啓子、生田美代子、市丸仁一、鶴飼愛子、宇都幸子、江口節、黄貞順、太田美穂、大多和紀子、奥山隆生、小澤紘子、小田尚子、小野秀男、岸野春子、公益財団法人神戸 YMCA、近藤悦生、斉藤茂樹、坂戸勝、島田誠、新宗連青年会近畿連盟、住野和子、空野仁志、高井喜久治、高野美智代、土本基子、長澤雄二郎、永松伸吾、橋本京子、林ひさ子、日比野恵子、ホンダユウキ、真板昭夫、松江直子、三浦真里子、水野明代、水平企、三輪行信、室崎益輝、本岡秀子、山崎清、山科満、山田千恵子、山平喜一郎、山本正紀、吉永孝代、吉野恵子、和田幹司

イベント情報

CODE 未来基金サポーターミーティング・活動報告会

CODE 未来基金に関わる若者や、若者を応援してくださるサポーターのみなさんと一緒に、これまでの未来基金を振り返り、これからの未来基金について考える「サポーターミーティング」と「活動報告会」を、今秋開催予定です！

詳細が決まりましたら改めてご案内させていただきます。みなさまぜひご参加ください！



サポーターミーティングの様子

CODE 未来基金 震災 25 年企画「若者たちは今～未来基金に参加した若者が語る～」

これまで CODE 未来基金のプログラムを経験した若者は、今現在どのような活躍をしているのか、未来基金での学びがどのように活かされているのか。若者自身が講師として語る企画を開催します！2019 年 10 月から 2020 年 2 月にかけて毎月 1 回、全 5 回のシリーズです。

阪神・淡路大震災から 25 年を前に、KOBE で育まれてきた市民活動の次世代を担う若者が、NGO や社会的企業、社会貢献などもう一つの生き方を語ります。

こちらも、詳細は後日ご案内させていただきます。ご期待ください！



未来基金による海外フィールドワーク

共に CODE を創りませんか？

活動へのご協力をお願いいたします

ご寄付のお願い

CODE の活動を継続するために皆さまのご寄付を募っています。救援プロジェクトへのご寄付は 25% を上限として CODE の管理運営費に使わせていただいております。ご協力をお願いいたします。

【郵便振替】

加入者名: CODE
口座記号番号: 00930-0-330579

【銀行振込】

ゆうちょ銀行
支店名: ○九九 (ゼロキュウキュウ)
支店番号: 099
預金種別: 当座
口座番号: 0330579
口座名義: CODE

講演会・報告会派遣

講演会、報告会を開催してみませんか？あなたの住んでいる地域で開催される講演会に CODE のスタッフを講師として派遣します。お気軽にお問合せください。
現在、神戸学院大学や神戸女子大学、神戸大学などで講義をさせていただいています。

入会のお願い

私たちとともに CODE の活動を担っていく会員を募集しています。

【正会員】

CODE の意思決定に参加し、活動に積極的に関わっていただく会員です。総会での議決権を有します。

個人・学生: 年会費 5,000 円 × 1 口以上
NPO/NGO: 年会費 5,000 円 × 1 口以上
企業・団体: 年会費 30,000 円 × 1 口以上

【賛助会員】

CODE の活動に賛同し、資金面で継続的にサポートしていただく会員です。

個人・学生: 年会費 2,000 円 × 1 口以上
NPO/NGO: 年会費 2,000 円 × 1 口以上
企業・団体: 年会費 10,000 円 × 1 口以上

ボランティア募集

事務所での作業や翻訳、自宅でも可能な作業などのボランティアを募集しています。

CODE とは？

1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災で、KOBE (阪神・淡路大震災のすべての被災地を指します) は世界 70 余りの国々から支援を受けました。その後「困ったときはお互い様」の想いから、世界各地の災害を支援しようと市民による救援活動が活発化してきました。

KOBE の経験と知見を活かし、幅広い智恵や能力をもつ企業、行政、国際機関、研究機関、NGO などを含めた市民の集まる場として 2002 年 1 月 17 日に NPO 法人として発足したのが CODE 海外災害援助市民センターです。

CODE は前身となる阪神大震災地元 NGO 救援連絡会議の時期も含め、これまで 62 回の救援活動を行ってきました。「最後のひとりまで」の理念を胸に、「寄り添いからつながりへ」人間復興となる救援を実践しています。

CODE の活動とは？

CODE は 2019 年 7 月現在、アフガニスタン、中国・四川省、青海省、フィリピン、ネパール、インドネシアでの救援プロジェクトを実施しています。ネパールでの耐震住宅再建プロジェクトやアフガニスタンでのぶどうプロジェクトなど、長い目で見た支援を「最後のひとりまで」という理念を持って KOBE から世界の被災地へとどけています。

また、CODE の活動を未来へつなげるために「CODE 未来基金」を立ち上げ、若手 NGO スタッフやこれから国際協力や災害支援を志す若者をサポートしています。未来基金を通じて若者が NGO で働くことができる社会を創っていきます。

発行元

(特活) CODE 海外災害援助市民センター

〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通 2-1-10
TEL: 078-578-7744 FAX: 078-574-0702

E-mail: info@code-jp.org
HP: http://www.code-jp.org/